

# 複合辞「～となると」について

藤田 保幸

## 1. はじめに

1-1 この稿では、次例に見られるような「～となると」という形式をとり上げて、その成り立ちや表現性についていささか考えてみたい。

- (1)―a 鬼怒川が氾濫したとなると、その被害は甚大だ。
- (2)―a 田舎に引越すとなると、何かと不便なことも出てくるだろう。
- (3)―a 青森までは新幹線で行ける。しかし、函館となると、まだ在来線に乗り継がなければならない<sup>1)</sup>。
- (4)―a オとヲの混同は十世紀以降次第に目立つようになるが、最古の例となると、『地蔵十輪経』元慶七年点のものが知られている。

こうした「～となると」は、「なる」が、主語をとることができないことから明らかのように、動詞としての性格を稀薄にして、「となると」でひとまとまりの助詞的形式、すなわち、複合辞として働いているといえる。この稿では、こうした「～となると」がどのような表現と連続するところに位置づけられ、また、表現としてどのような特性をもつかという点について考察する。

1-2 複合辞「～となると」については、類義的な言い方として、「～となったら」「～となれば」のような形式が考えられる。このうち、「～となったら」は、文的なフレーズを承ける場合は、「～となると」と置き換えて自然な場合が多い。

- (1)―b 鬼怒川が氾濫したとなったら、その被害は甚大だ
- (2)―b 田舎に引越すとなったら、何かと不便なことも出てくるだろう。

しかし、「～となると」が、江田(1991)も指摘するのとおり、假定・確定の両方の意味で使えるのに対し、「～となったら」は、もっぱら假定でしか使えず、はっきり確定した事柄を述べる場合には、不自然になる。

- (1)―c 既に鬼怒川が氾濫したとなると、その被害は甚大だ。
- (1)―d \*既に鬼怒川が氾濫したとなったら、その被害は甚大だ。

また、名詞句を承けて「主題」を示すような用法では、「～となったら」は使えない<sup>2)</sup>。

- (4)―b ?……、最古の例となったら、『地蔵十輪経』元慶七年点のものが知られている。

一方、「～となれば」は、やや硬く感じられる面はあるが、概ね「～となると」と相互に書き換えてもほぼ同義になるよう

である。

(1) e 鬼怒川が氾濫したとなれば、  
その被害は甚大だ。

(4) c ……、最古の例となれば、『地  
蔵十輪經』元慶七年点のものが  
知られている。

以上、類義形式「～となったら」「～となれば」と、「～となると」との異同について見てみたが、以下ではもっぱら「～となると」について述べ、これらの類義形式について特にとり上げることはしない。

## 2. 先行研究とこの稿での整理

2-1 複合辞「～となると」について考察した論文としては、江田(1991)(1992)があり、「～となると」そのものについての江田の考え方は江田(1991)に示されているので、江田(1991)について見ておきたい<sup>3)</sup>。

江田は、「～となると」の用法を「変化」「考慮」「想定」「主題」の四つに分けている。「AとなるとB」のパターンとして言うとき、このうち「変化」とは、例えば(5)の例がそれで、事態がAのように変化した(もしくは、変化することになった)後にBのような事態があるという関係をいう用法、また、「考慮」は、(6)のように「Aという事実をふまえると」「Aという事実から判断すると」といった言い換えが可能な用法、「想定」は、(7)のように「Aとなると」という前件節に「もし」「仮に」のような副詞が共起できる仮定条件の用法をいう。そして、「主題」は、(8)のように名詞句を承ける「～となると」が「は」に置き換えられる用法である。

(5) さて、久しぶりに彼女に会うと

なると、彼は朝からそわそわし通しだ。

(6) 佳那が被害者に最後に会ったのが五日だとなると、犯行はその後だ。

(7) 実際にブラジルまで行くとなると、その費用は馬鹿にならない。

(8) 犬なら飼ったことはあるが、クマとなるとどのようによ世話したらいいか見当がつかない。

しかし、江田も言うように「変化」と「考慮」は重なる(区別し難い)場合も多く、また「想定」(つまり、仮定)か否かも文脈に依り、コンテキスト・フリーには判断し難いことも多い。実際、冒頭の(1)(2)の例など、「変化」とも「考慮」とも「想定」とも、いずれとも解釈できそうである。

2-2 むしろ、この稿では、「～となると」については、「主題」の用法と、「変化」「考慮」「想定」を一括した「条件」の用法とを区別して考えておきたい(「条件」の用法では、文脈に応じて、確定条件も仮定条件も表される)。

こうした区別をすることは、次のようなことを考慮してのことでもある。「～となると」は、複合辞化してもはや主語は立たないが、意味の上で敢えて「なる」の主語を考えるなら、「条件」の用法では「事態」「状況」「主題」の用法では「問題(となること)」「話・話題」といったことが主語的な内容として想定し得るだろう。冒頭の例を再掲して言えば、

(2) a 田舎に引っ越すとなると、何かと不便なことも出てくるだろう。

(4) a ……、最古の例となると、『地蔵十輪經』元慶七年点のものが

知られている。

「条件」用法の(2)の場合、「なる」には「(事態・状況が) 田舎に引っ越すと」とのような主語的内容を想定し得るし、「主題」用法の(4)の場合、「(問題(となるの)が) 最古の例となる」とのような主語的内容を想定できる。

この点、既にグループ・ジャマシイ(1998)が「～となる」との用法を分類する中で、「節を受けて、『……のような場合は』『……のような状況になった場合は』という意味を表す」(351頁)、「名詞を受け、『そのことが話題／問題になるときは』という意味を表す」(同) とすると、上記は基本的に同じ理解の方向だと言ってよい。

ただし、「条件」の用法の場合でも、次のように名詞句を承けて条件節を形成する言い方が可能である。

(9) 列車の到着となると、俄然ホームは活気をとり戻す。

2-3 また、江田(1991)では言及されていないが、「～となる」とには、次のような疑問文的フレーズを承ける言い方もある。

(10) 大きな欠陥は見当たらないらしい。だが、本当に大丈夫かとなると、よく分からない。

グループ・ジャマシイ(1998)では、この稿でいう「主題」の用法にあたる例と(10)のような例は、一応別扱いられているが、この稿では、(10)のような例も、「主題」の用法の一つとして考えたい。というのも、こうした例でも、意味の上で「となる」との「なる」の主語的内容を考えるなら、「だが、(話が) 本当に大丈夫か

となると」のように「問題」「話・話題」といったことが想定できるからである。それに、(構造として偶然そうなるという面もあるが) こうした例の「となると」は、多くの場合、「は」に置き換え可能である。

(11) 本当に大丈夫かは、よく分からない。

2-4 以上、整理すると、「～となる」とには、(1)(9)のような「条件」の用法と、(4)(10)のような「主題」の用法があり、それぞれ文的フレーズを承けるパターンと名詞的フレーズを承けるパターンが考えられるわけである。

(1) 鬼怒川が氾濫したとなると、その被害は甚大だ。

(9) 列車の到着となると、俄然ホームは活気をとり戻す。

(4) 最古の例となると、『地藏十輪経』元慶七年点のものが知られている。

(10) 本当に大丈夫かとなると、よく分からない。

上記の整理をふまえ、以下では、それぞれの用法の成り立ち、パターン相互のつながりを考えてみることにする。

### 3. 「～となる」との各用法の成り立ちと各パターンの連続性

3-1 まず、「条件」の用法の方から考えてみたい。ところで、「条件」の用法の冒頭の(1)(2)などの例では、「～と」に文的なフレーズが出てくることから、「～となる」とは引用形式に近いもののようにも見られ、例えば次のような、発話されたと見なされるコトバを引いて示す

「～となる(／なった)」のような言い方と連続するもののようにも思える(以下、このような「～となる(／なった)」が文末にくる言い方を、「～となる」表現と呼ぶ)。いわば、こうした「～となる」が条件形の形に展開したのが、複合辞「～となると」かと考えられるわけである。

(12) 緊迫した応酬が続いた後、「今日はこれまで」となった。

ただ、(1)(2)のような言い方は、(12)のような言い方と直ちに連続するものではない。(1)(2)のような言い方で「～と」の部分に出てくるのは、問題の事態を直接描くフレーズだが、「～となる」表現では、そうしたフレーズが出てくると不自然である。

(1)‑f \*激しい雨が続いた結果、鬼怒川が氾濫したとなった。

(2)‑c \*いろいろあって、田舎に引越すとなった。

(12)のように「～と」に発話のコトバが引かれているように見える例でも、そのコトバは直接事実を叙述するのではなく、いわば提喻的に事実を指し示す——つまり、そのようなコトバがそこで発せられるような事実があるということを指し示すものといえる。次の例などもそうであろう。

(13) 運悪く敵に見つかって、「ハイ、それまでよ」となった。

以上のとおり、引用されたコトバを承ける「～となると」表現が条件形に展開されたのが「条件」の用法の「～となると」だとは言えない。そもそも「～となる」表現では、事態を直接描く文的フレーズが「～となる」の「～と」に出てくるものではない。

むしろ、「条件」の用法の「～となると」に連続するのは、「～となる」表現のうちでも次のようなタイプのものである<sup>4)</sup>。

(14)‑a すったもんだのあげく、いよいよ黒幕の登場となった。

この場合の「～と」の部分に出てくる「黒幕の登場」は、名詞句の形で問題の事態を直接描いたものといえる。そして、このような「～となる」表現は、「～となると」の形にしても自然な表現が作れる。

(14)‑b いよいよ黒幕の登場となると、心してかかる必要がある。

名詞句を承ける「～となる」表現と、名詞句を承ける「条件」の用法の「～となると」の連続性は明らかだろう。

3-2 およそ、(12)(13)や(14)‑aのような「～となる」表現は、経緯を示す先行文脈を承けて、その結果としての事態を述べる言い方である。そして、「なる」については、一般には「になる」と「となる」の両形が考えられるが、この場合は「と」でなければならぬ。「に」と「と」の相違については、しばしば問題にされるところではあるが、次例に見るような「に」の表現と「と」の表現の相違をふまえれば、「に」がもつばら変化結果としてのあり様を示すのに対し、「と」はその時(描写がなされる時)そこで見てとれるあり様を示すものというように考えることができよう。

(15)‑a 早津氏を代表にする会〔＝コレカラ早津氏ヲ代表ニシヨウトスル会〕

(15)‑b 早津氏を代表とする会〔＝コノ時既ニ早津氏ガ代表デアル会〕

このことを考え合わせるなら、「～となる」表現は、先行文脈に示される経緯を承けて、そこで事態はどうなるのかを、いわば静止画像的にクローズ・アップして示すものであり、そのことに応じて、「～と」の部分にも（直接に事態を描くのであれば）表象の喚起をもつぱらとする凝縮した形の名詞句が出てくるということであろう。

そして、こうした「～となる」は、もはやこれに対する主語が現われることはない。主語が立たなくなっていることで辞的なものに移行し、いわばコンピュータに近くなっている。それ故、「となる」を「だ」に置き換えても近似的な表現として成り立つことが多い。

(14)—c すったもんだのあげく、いよいよ黒幕の登場だ。

辞的なものに移行している点で、既にこうした「～となる」表現の「～となる」と、複合辞「～となると」には、共通する面が見いだせるが、更に「～となる」表現の「なる」に敢えて主語的な内容を考えるなら、「(事態・状況ハ) 黒幕の登場となった」というように、「事態」「状況」といったことが、主語的内容として想定できるだろう。この点でも、「～となる」表現と「条件」の用法の「～となると」の連続性は明らかである。

従って、「条件」の用法の「～となると」は「～となる」表現の「～となる」が条件形で用いられた形だと位置づけてよいと思われるが、ただ、「～となる」表現が結果事態をクローズ・アップし「焦点」として示す言い方なのに対し、「～となると」は「前提」としての「条件」を示すものであって「焦点」ではないので、表象喚

起をもつぱらとする凝縮した名詞句の形だけでなく、分析的に展開された文のような形をもとれるようになっているのだと考えられる。つまり、「～となると」の形をとることで、用法が拡張しているわけである。

3-3 一方、「主題」の用法の場合にも、「～となると」の「～と」の部分に文的なフレーズが出てくる例が見られた。

(10)—a だが、本当に大丈夫かとなると、よく分からない。

こうした例の場合は、「～となる」表現との連続性はむしろ読みとりやすいように思われる。同様の文的なフレーズをとった「～となる」表現は、一応無理なく考えることができる。

(10)—b いろいろと議論の末、「本当に大丈夫か」となった。

ただし、aとbとでは「本当に大丈夫か」の表す内容がいささか違っていることに注意したい。bの「本当に大丈夫か」は、このようなコトバの発せられる状況があることを指し表すものであり、先に見た提喻的用法の引用されたコトバであるが、aの「本当に大丈夫か」は、むしろこのフレーズの意味する内容が問題になっている。角度を変えて言えば、bの「なる」の主語的内容は、「(事態ハ)『本当に大丈夫か』(トイウ声ガアガル状況) となった」のように、「事態」であるのに対し、aの「なる」に対して想定される主語的内容は、「(話が)『本当に大丈夫か』となると」のように、「話・話題」「問題」である。同じような文的フレーズを承けても、「～となる」表現と「主題」の用法の「～となると」では、それを問題にする意味合い

は、微妙にずれている。

してみると、aのような「主題」の用法の「～となると」は、bのような引用されたコトバで“焦点”となる事態を指し表す「～となると」表現が、“前提”を表す条件句の形をとり“焦点”を表すものでなくなることで、意味が微妙に変化したところに成り立っている用法といえよう。

従って、いったんまとめると、“焦点”を示す「～となると」表現が、“前提”を表す条件句「～となると」の形をとることで、形の上で用法拡張して成立しているのが「条件」の用法の「～となると」であり、意味の面で変化が生じて成立しているのが「主題」の用法の「～となると」であると言っていざらう。

3-4 さて、「主題」の用法の「～となると」には、名詞句を承ける用法もあり、むしろその方が一般的というべきなのだが、そうしたパタンと文的フレーズを承けるパタンのつながりは、いささか複雑である。一つには、「～か」のような疑問文的フレーズを承ける用法と、「問う」という意味合いにおいて連続性があるものがある。例えば、

(4) —a ……、最古の例となると、『地藏十輪經』元慶七年点のものが知られている。

のような例がそれで、この前件節の部分は、「最古の例は何かとなると」とパラフレーズしても不自然でないように、問題として問われることの中心が名詞句として示されているといえる。その意味で、「問う」という意味合いにおいて、「～か」のようなフレーズが出てくるパタンと連続している（「最古の例はとなると」のよ

うな形を介して、その連続性をたどることもできよう）。

今一つは、次のような例で、

(3) —a ……、函館となると、まだ在来線に乗り継がなければならぬ。

この前件節の部分は、「函館には（新幹線で）行けるのかとなると」のように疑問文的なフレーズを承けた形にパタンにパラフレーズできないことはないが、むしろ「函館に行くとなると」とするのが、この文脈では自然である。文脈上わかるので述語が消えて、事柄内容の中心となる名詞句だけが残った形である。もちろん、「函館に行くとなると」なら「条件」の用法であるが、述語が消えると、残った名詞句自体には事態・状況を表す意味がないので、「主題」の用法と解されることになる。

以上、名詞句を承ける「主題」の用法の「～となると」について見てみたが、こうした「主題」の用法は、単に項目を取り立てるのではなく、その項目に関わる事態や問いを背景にした表現だといえる。既に森田・松木(1989)では、「～となると」について、「他の題目提示の複合辞と違うのは、取り立てた事柄が内包している条件・資格などを想起した上でそれに判断を下すといった意図が強くこめられている点である」(53頁)と述べられているが、この記述がおさえようとしたことを、よりの確におさえようと言うなら、上述のようなことになるだろう。

この三節では、「条件」の用法及び「主題」の用法の「～となると」の成り立ちや用法・パタンのつながりについて考えてみた。節を改めて、次に「～となると」の

表現性について、いささか考えてみたい。

#### 4. 「～となると」の表現性

4-1 まず、「条件」の用法の「～となると」について、次のようなことを指摘しておきたい。こうした「～となると」は、以下に対する「条件」としての事態・状況をとり上げるものといえるが、問題のその事態・状況に、いわば当事者的に向き合うといった意識がついて回るようである。例えば、次の例で言えば、

(15) 真田家のことを調べるとなると、松代のみか、上田へも足を運ぶことになった。

(池波正太郎「むかしの味」)

“「真田家のことを調べる」という事柄に取り組むという状況に至った、そういう状況に向き合うことになった、そうすると……”といった状況説明が「～となると」節で示されているといえる。

そうしたニュアンスが最も端的にうかがえるのが、「いざとなると」のような慣用的な言い方だろう。

また、そうした“向き合う”意識は、“～となると”が「～となる」表現と連続するものであり、「～となる」の「と」が（「に」と比べ）“そこで見てとれるもの”を描き出すような表現性をもつこととつながるのである。

従って、「～となると」で示された問題の状況・事態に対してきちんと向き合わず、いわばおぎなりの対応をするような内容の後件が出てくると、表現として不自然になる。やはり条件を表す「～（の）なら」節と比べると、このことは明らかだろう。

(16)—a 課題レポートを出さなかつ

たのなら、そのままでは済まされない。

(16)—b 課題レポートを出さなかつたとなると、そのままでは済まされない。

(17)—a 課題レポートを出さなかつたのなら、後で何か別のことをやらせておけばよい。

(17)—b <sup>?</sup>課題レポートを出さなかつたとなると、後で何か別のことをやらせておけばよい。

4-2 次に、こうした「条件」の用法の「～となると」は、これによって持ち出される状況・事態を、いわば“物事の段階的な進展・推移”の意識でとらえる言い方といえる。例えば次例の場合、事態が「政府がデフレを正式に認定した」というように推移したというような意味合いが読みとられよう。

(18) 政府がデフレを正式に認定したとなると、世間の目は通貨の価値に責任を負っている日銀に向かう。

(毎日新聞、朝、2009、12、6)

何らかの事態・状況が出てくる・生じてくるということは、そうでない状況に対し、動きがあり、物事が進展するといった意味合いで受けとめられ得ることである。「～となると」は、そうした意識で事態・状況をとり上げる言い方である。このことは、「～となると」の「なる」の原義が抽象化しつつも生きていると考えれば、納得できることだろう。

従って、次のように、物事を段階的に考えて述べるような言い方で「～となると」はしばしば用いられる。

(19) 私は昨年の合唱コンクールの

前にも同じような不安を抱えていた。一人で練習するときは弾けるのに、皆の前で弾くとなると指が震えてしまう。(毎日、朝、2010、9、26)

4-3 「条件」の用法について“段階的な進展・推移”の意識が含みとして読みとれることを述べたが、「主題」の用法についても、同様の意識は読みとられる。ただ、この場合は“物事の段階的な進展・推移”ではなく、“話の段階的な進展・推移”である。

(20) 水草の「ひし」は各地の池や沼に浮かんでいるはずなのに、その実となると「見たことも、食べたこともない」のが多数派。

(毎日、朝、2009、10、26)

(21) 「4月—3月制」の規定は1900年の小学校令施行規則にさかのぼりますが、その根拠となると、確かな記録は見当たらないようです。

(毎日、朝、2009、4、9)

江田(1991)では、こうした「主題」の用法について、「文中になんらかの比較の視点が含まれている」(158頁)とするが、これは、上記のような“段階的な進展・推移”の意識のもとに叙述が進められることから、自ずと出てくることである。

「～となると」を用いる場合、以上のような意識が働いていることは、次のような事実からも了解できる。すなわち、話題が転換して話が段階的に進むとはいえないような場合、「主題」を表すものであっても、「は」などと違い、「～となると」は用いられない。

(22)—a 飛行機を使わずに北海道へ

行くそうだが、青森までは新幹線で行けるよ。だが、函館は、在来線への乗り換えが必要だ。

(22)—b 飛行機を使わずに北海道へ行くそうだが、青森までは新幹線で行けるよ。だが、函館となると、在来線への乗り換えが必要だ。

(22)—c 飛行機を使わずに北海道へ行くそうだが、青森までは新幹線で行けるよ。ところで、函館は、交通の便はともかく、なかなかの都会だ。

(22)—d <sup>?</sup>飛行機を使わずに北海道へ行くそうだが、青森までは新幹線で行けるよ。ところで、函館となると、交通の便はともかく、なかなかの都会だ。

4-4 今一つ、次のようなことにも注目しておきたい。「～となると」は、「～とすると」とも一面では近く、次のように同様のことを言うのにどちらも用いられることもある。

(23)—a 午後から雨が降るとすると、傘が必要だな。

(23)—b 午後から雨が降るとなると、傘が必要だな。

しかし、両形式の表現性は必ずしも同じではない。「～とすると」も「～となると」も、仮定の言い方で使える(上記abも仮定ととれる)が、「～となると」の場合、いったん仮定して述べて、以下でそれを否認するような言い方では使えない。

(24)—a もしも昨日彼に会ったとすると、彼は既に殺されていたの



だから、そんなことはあり得ない。

- (24)—b<sup>?</sup>もしも昨日彼に会ったとなると、彼は既に殺されていたのだから、そんなことはあり得ない。

すなわち、「～とすると、……そんなことはあり得ない」のようなつながりは十分成り立つが、「～となると、……そんなことはあり得ない」のようなつながりは不自然なものになる。

このことには、しばしば問題になるスル表現とナル表現の相違が関わっているように思われる。すなわち、事柄を自然生起的に描くナル表現に対して、我々はしばしばその事柄を受け入れざるを得ないように感じがちである（実際、「点検のため、午後はエレベーターは使用中止にします」などと書かれていたりすると、それじゃ不便だから何とかしてくれと文句の一つも言いたくなるが、「点検のため、午後はエレベーターは使用中止になります」とあったら、それでは仕方ないなど諦めるといったことは、ままあることである）。それ故、「～となると」で想定した事柄については、受け入れる意識が働き、否認し難いのだろう。このように、構成要素（動詞）のもともとの表現性が複合辞の用法に影を落とすことは、しばしば見られることである。

関連して、また次のようなこともある。「～とすると」に対しては、「～としても」のような逆接・譲歩の形式が考えられるが、「～となると」に対して「～となっても」のような形式は、ふつうは使われない。bのように絶対に言えないわけではなからうが、少なくとも自然な表現では

ないだろう。

- (25)—a 雨が降ったとしても、傘はいらないだろう。

- (25)—b<sup>?</sup>雨が降ったとなっても、傘はいらないだろう。

(25)のような逆接・譲歩の文で言わんとすることは、前件の事柄があってもそれに左右されず後件の事柄が成り立つという関係であろうが、「前件の事柄に左右されず」というように、実質的に前件の事柄を無効とすることになる述べ方と、「なる」について回るナル表現の「受け入れる意識」とが矛盾する故、「～となっても」のような形式が複合辞として成立しにくいのであろう。

## 5. 結び

5 この稿では、複合辞「～となると」をとり上げ、その用法・パタン<sup>1</sup>の関係を整理するとともに、その表現性についても、いささか立ち入って考えた。

個々の複合辞の表現としての特質については、まだまだ考察・記述が深められる必要がある。この稿は、そうした問題意識による各論的記述の一つである。

### 注

- 1) 2015年末現在の話。2016年3月になると北海道新幹線が開業し、函館まで新幹線で行ける。
- 2) 次のように、「～のこと」のような名詞句を承ける言い方では、「～となると」は「～となったら」に置き換えが可能だが、

- (ア)—a 趣味の鉄道のこととなると、小田氏は話題が尽きない。

- (ア)—b 趣味の鉄道のこととなっ

たら、小田氏は話題が尽きない。こうした例では、一応まだ「なる」に対して主語を立てることができるので、複合辞の例とは言えない。こうした「～のこととなると」「～のこととなったら」は、「主題」というより、後件に対して前提条件を示す節というべきであろう。また、複合辞「～となると」は「～になると」の形には置き換えられないのに対し、これらは「～になると」と置き換えてもほぼ同義の表現になるので、やはり複合辞「～となると」とは別に考えるべきものといえる。

(ア)―c 話が趣味の鉄道のこととなると(／となったら)、小田氏は話題が尽きない。

(ア)―d 趣味の鉄道のことになると、小田氏は話題が尽きない。

3) ちなみに、江田(1992)は、江田(1991)をふまえ、「～となると」と「～と」「～とすると」を比較している。

4) なお、次のような「～コト」節が出てくる言い方も考えられるが、これは「～になる」の形と置き換え可能であり、むしろ「～ことになる」のような言い方からの類推で出てきた言い方と考えられる。

(イ)―a すったもんだのあげく、いよいよ黒幕が登場することになった。

(イ)―b すったもんだのあげく、いよいよ黒幕が登場することになった。

「黒幕の登場となった」のような「～となる」表現は「黒幕の登場になった」とすると不自然(また、「黒幕の登場となると」も「黒幕の登場になると」とす

ると不自然)であるので、こうした「～こととなる」のような言い方は、ここで問題にしている「～となる」表現とは別の言い方と考え、考察の対象からはずす。

#### 参考文献

江田すみれ(1991)「複合辞による条件表現Ⅰ『となると』の意味と用法」(『日本語教育』75)

—————(1992)「複合辞による条件の表現Ⅱ——『と』『とすると』『となると』の意味と機能について」(『日本語教育』78)

森田良行・松本正恵(1989)『日本語表現文型』アルク

グループ・ジャマシイ(1998)『日本語文型辞典』くろしお出版

#### 【付記】

本研究は、JSPS 科研費(基盤研究(B))「日本語の多様な表現性を支える複合辞などの『形式語』に関する総合研究」・課題番号26284044)の助成を受けたものである。

(龍谷大学)